

りこうなハンス

オスカル・ブングスト著、柚木治代訳
丸善プラネット
277頁 2,160円



ウマはなぜ 「計算」できたのか

オスカル・ブングスト著、秦和子訳
現代人文社：大学図書
369頁 2,160円

本書の扱う動物は、ウマである。主要な家畜のひとつであるウマの、人に対する反応や人の動作の読み取りは、畜産上のウマの役割（乗馬など）から、重要である。本書は、約100年前の「クレバーハンスの事件」を、科学的に解明したブングスト氏による全実験記録である。また本書は、家畜を扱う者が陥りやすい、人と動物の関係の誤解を解き、正確に評価できるようになるための啓蒙書でもある。さらに本書は、社会一般のオカルト的解釈を、科学的手法へ引き戻すための戒めの書でもある。

現在、よく実験で用いられる二重盲検法の必要性を、この実験結果は指摘している。「ダーウィンの進化論」、「フロイトの心理学」などの表現を借りれば、「ブングストの実験心理学」ともいえる業績であろうが、現在のところ「クレバーハンス効果」と、実験者ではなく、被験者であるウマの名前が冠されている。

本書の原著は、「Das Pferd der Herrn von Osten (Der Kluge Hans)」という表題で、「フォン・オステン氏の馬」が直訳になろう。この原書の翻訳本は、標記のように2つ入手可能である。初めての方は、図書館でこの本を借りるときには、ぜひ、2つを同時に借りて、読み進めることをお勧めする。

一方の訳文で分かりにくい表現があった場合も、他方の表現で理解できるということもある。「ウマはなぜ計算できたか」の方からは、訳者の熱い思いが伝わってくる。巻末にある秦氏の「訳者の言葉 - ブングストのハンス事例調査

の歴史学的意義」は、それ自体が、きわめて興味深く、要点良くまとめられた名著である。

「りこうなハンス」では、シュトランプ教授の解説文を本文の後ろに配置している特徴がある。訳者の短いはしがきを最初に配置し、本書中の凡例も記載することで、最初に謎解きがわかつてしまうことを避け、教科書的に使う場合はとても分かりやすく、便利な構成になっている。

研究論文集の解説には変な話だが、この本の登場人物として、著名な研究者のシュトランプ教授、助手のホルンボステル博士、著者のブングスト氏、ハンスの飼い主のフォン・オステン氏、シリングス氏そして馬のハンスとその社会的役割および社会的背景などのメモをもとに読み進めると、とても判りやすい。第1章には、必要な基礎知識である、当時（約100年前）の「動物の心の3つの見解」、「ハンスのパフォーマンス（何ができるか）」および「ハンスへの世間の評価」が記載しており、第2章の実験・解決編に向け読者は、準備できるようになっている。

こうした準備の後に、100年前の研究にタイムリープして、オカルト的解釈を、科学がどのように駆逐したかを体験してみよう。科学の緻密さ、素晴らしさが再認識されることになる。しかし、科学的事実を解明した結果、ハンスたちのその後については、少々切ない物語をいずれの本も掲載している。そうした後日談はともあれ、科学を志す者としては、一度は読んでおきたい良書のひとつである。

（酪農学園大学 家畜管理・行動学 森田 茂）